

育としての家政学は、総合教育として形成され、しかも既存の生活体制の枠内で、それを維持しこれに順応することに主たる関心が注がれ、その体質改善をめざす問題意識が希薄であった。以上には各々理由があるのであるが、このような教育上の特徴は、学問としての家政学の成立に著しい影響を与えている。すなわち、研究もまた教育と同様、既存の生活体制を与えられたものとし、体制自体を課題とする伝統を欠いてきたために、部分的断片的で有機的連関性を欠き、その諸研究は、現象把握にとどまりがちで、家庭生活の全体的なまた合法的な把握、ないし本質把握その努力が欠けていた。そのため、家庭生活において重要な役割を果たすと思われる人と人、人と物との対応関係を律する基準については、その学問的基礎を家庭生活そのものの法則より既成の道徳や科学に求める傾向が濃厚であった。これを助長したものは、教育としての家政学における権威主義的伝統、教条主義的及び実用主義的性格である。その結果、学問としての家政学は、家庭生活を客観的かつ全体的に反映してこれと密接に対応する関係をもたず、それより既成の道徳や科学に従属してこれらに分解埋没する性向を示すに至っている。このような現象は、家政学が学問として成長するための最大矛盾点であるといわねばならない。

### 30 家政学的研究の特徴と限界（その2）

東北大農 西原 照久  
佐々木嘉彦

家政学は、元来、家庭奉仕者としての女子の行動様式に関する教育として登場し発展してきた。このような教